

ジャガイモと映画 (15)

<蒸留酒>

Web ジャガイモ博物館館長 あさま かずお
浅間 和夫

57『大脱走』

(原題：The Great Escape)

1963年、アメリカ映画。監督：ジョン・スタージェス。

豪華キャストで面白い戦争映画の範疇に入るが、戦闘シーンは出てこない。本『ジャガイモと映画』シリーズの中のお勧め映画の一つである。筆者をして、"映画の中にジャガイモが出てくるものが他にもありそう。今後映画を意識的に観てみよう"、と動機付けさせた映画である。

第二次世界大戦中に、ナチス・ドイツ軍がスイスの近くに連合軍の脱走常習犯空軍将校ばかりを集めてスタラグ・フルト北捕虜収容所をつくった。その中には英軍大佐ロジャー・バートレット (リチャード・アッテンボロー) もいる。ドイツにとって腐ったジャガイモは同じ籠に入れて管理するのが良かったのであろう。しかし、厳重な監視にもかかわらず、捕虜達はトムと名づけた地下トンネルの掘削など、脱走の秘策を練る。最後に驚くなかれ250名が一度に抜け出すという計画を進めていく。

ある脱走計画が仕上げに近づいたとき、主人公であるアメリカ人バージル・ヒルツ (スティーブ・マックイーン) が大量のジャガイモを手にいれてくる。目的は何かと訝る兵士達を前に、彼はジャガイモの皮を剥



写真1 ジャガイモ蒸留酒製造中

く。

7月4日の朝が来る。彼は星条旗を掲げ、兵士達をたたき起こし、アメリカ独立記念日を祝おうとする。彼がジャガイモでつくっていたのは、密造本格焼酎だった (写真1)。ヒルツのお陰で、兵士たちは久しぶりにアルコールにありつき、喜び合う。

ヒルツはどんな手段で写真のランビキかぶとかま (兜釜式焼酎蒸留器) をゲットしたのか。彼らの必要物資の調達力には驚かされる。この蒸留に使っていたランビキ、逃亡時に着用するそれぞれに似合う衣類、身分証明書を偽造するための小道具等々、必要とするものは何でも揃えてしまっている。

しかしジャガイモ焼酎で乾杯し、お祭り騒ぎした日トムがバレてしまう。これで屈する彼らではない。最後に逃げ切るダニー (チャールズ・ブロンソン) は自分が掘る17番目のトンネルで汗流す。その後の脱走

計画実行の苦勞と結果は…。これから見る人のため、書かずにおくこととする。

58『第十七捕虜収容所』

(原題：Stalag 17)

1953年、アメリカ映画。監督：ビリー・ワイルダー。

これも第二次大戦末期。スイスとの国境に近いドイツの第17捕虜収容所の一画にアメリカ空軍の軍曹ばかり集めた第四棟があった。1944年のクリスマスに近いある夜、2人の捕虜が仲間の協力を得て、脱走する。2人が出た後、無事に脱出できるかどうかの賭けが始まる。悲観説を唱えたのはセフトン軍曹（ウィリアム・ホールデン、写真）だけ。まもなく銃声が聞こえ、軍曹の予想どおり、2人は射殺される。

この計画が発覚したのは捕虜の中にスパイがいるからに違いないと、仲間内で問題になる。最も疑われたのはセフトンだった。実際セフトンは抜け目ない男であり、衛兵を買収して密かに外出したりしていたため、疑われる理由は充分ありだ。しかし、一同はセフトンからある意味で恩恵も受けていた。『競馬』と呼んで二十日鼠を走らせてタバコを賭けて暇潰ししたり、中庭で栽培した"ジャガイモの皮から蒸留器を使って得た酒"を、1杯煙草2本で飲ませてもらったり、彼手製の望遠鏡を借り、煙草1本で20秒間ロシア女性の裸を覗かせてもらっている（写真2）。

脱走者が射殺された数日後、ダンバー（ドン・テイラー）という中尉と、バグラディアン軍曹が収容される。中尉は、ドイツの軍用列車を爆破したことがあり、それを耳にした所長（オットー・プレミンジャー）



写真2 ウィリアム・ホールデン

の厳しい訊問を受ける。時は過ぎ、セフトンへの疑惑は更に深まり、一同は彼を袋叩きにする。セフトンはなんとか疑惑を晴らそうと、スパイの正体をつきとめる機会を考えることになる。やがてスパイはプライス（ピーター・グレイヴス）であることが判るのだが、現場を握るまで手を下すことは出来ない。

ダンバー中尉はベルリンへ連れて行かれることになり、捕虜たちは中尉奪還の計画を立て、成功する。そして中尉を夜のうちに脱走させるとき、プライスが同行を申し出る。セフトンは我慢できず、プライスを責めて自白させ、自ら中尉脱走を助ける役を買って出る。セフトンには成算があった。彼はプライスをオトリにし、集中射撃を浴びて倒れる隙にセフトンとダンバーは、首尾よく自由の世界へと向かう。

59『ヒトラー ～最期の12日間～』

(原題：Der Untergang、英題：Downfall)

2004年、ドイツ・オーストリア・イタリア

ア映画。監督：オリヴァー・ヒルシュビーゲル。

この映画も1945年4月、つまり第二次世界大戦末期の話であり、ベルリン市街戦を背景に、国家社会主義ドイツ労働者党（ナチス）のアドルフ・ヒトラーの地下壕における最期の日々を描くものである。

空路でソ連軍の包囲網を突破したグライム将軍と空軍パイロットのハンナ・ライチュが地下壕に到着し、ヒトラー（ブルーノ・ガンツ）は感激する。しかし、ヒムラーが連合軍と和平交渉を行っているという報告が入ると激怒する。

29日未明、ヒトラーは13年間の愛人エヴァ・ブラウン（ユリアーネ・ケーラー）と結婚式を挙げ、ささやかな祝宴を開く。

ベルリンの中心地も砲撃され、誰にもナチスドイツの負けが予想できるようになる。ヒトラーは「もはやベルリン脱出以外に生き延びる術はない」との進言を受け、市街地で負傷者の治療に当たっていた軍医のシェンクとハーゼ教授を呼び出し、自殺方法について相談する。

30日、ヒトラーは地下壕に残った人々と別れの挨拶を交わし、名誉の？自殺をするためにエヴァと共に居室に入る。総統個人秘書官が宣伝相ヨーゼフ・ゲッベルス（ウルリッヒ・マテス）の子供たちと食事中に銃声を聞く。翌日、地下壕の人々はベルリン脱出の準備を進め、ゲッベルス夫妻は子供たちを毒殺した後、自分たちも自殺し、脱出する人々を見送ったクレepsとブルクドルフも拳銃自殺する。そしてソ連軍に包囲されて降伏するものや、包囲網を脱出

し、無事に逃げ延びるものもでる。結局、5月8日、無条件降伏を受け入れる。原題は「失脚」「没落」の意である。

敗戦が濃厚な時、一般兵士はどこでどう死ぬかは選択できないが、地下壕のナチズム思想を心から信じ、共に殉ずる覚悟に取り憑か^つれているこの軍人たちは、服毒や銃自殺などを選択できた。死を待つしかない高官たちが、現実逃避のためテーブルに多量の無着色の酒を置き、ガブ飲みしているシーンがある（写真3）。

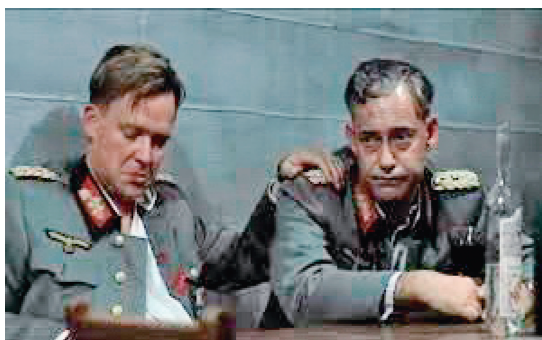


写真3 主原料がジャガイモの酒で現実から逃避

こんな局面で飲む酒は度数の低いワインやトイレ通いを増やすビールではなく、無色透明でアルコール度数の高いシュナップスであろう。主原料はジャガイモであるが、フルーツやハーブで味や香りを着けることもあり、北欧諸国ではそのようなアクアヴィットも含めるらしい。この呼称はラテン語の「aqua vitae」すなわち「生命の水」を意味する言葉が変化したものであり、適量飲めば薬にもなる。その原料はジャガイモなどであり。これを酵素や麦芽で糖化した後に発酵させ、蒸留して得られる。